

映画「おくりびと」に、本木雅弘さん演じる主人公が自分の父親の遺体に向き合うシーンがありました。

主人公は、幼い頃に父親と生き別れたため、父親に良い感情を持つておらず、遺体を見ても本当に自分の父親かどうかも分からない状態でした。ところが、葬儀社の人たちが遺体をモノのように扱った時、憤り、自分でも父親のヒゲを剃り、顔をきれいにし、髪を整えました。

そして両手を組ませようとした時、父親の掌から小石が転がり落ちてくる。父親と別れる前に「毎年〆石文を送り合おう」と約束した、その時の石だったのです。その瞬間、父親の葛藤と自分への思いを知ると同時に、幼い頃の父親との思い出がフラッシュバックする……。

感動的なシーンでした。「おくりびと」の主人公が、遺体を丁寧に扱わない葬儀社の人たちに感じた憤りが、私にはと

てもよく分かります。もしもそれを許し、父親を顔も分からない状態で見送ったとしたら、親子関係は崩壊したままで、彼は一生そのことをひきずったのではないのでしょうか。きれいに整った父親らしい顔に対面できなかったこそ、昔の思い出がフラッシュバックし、気持ちの整理ができたのではないかと思えます。

愛する家族を失う悲しさは計り知れませんが。遺族は、亡くなった現実を受け入れられなかったり、「あの時、ああしてあげればよかった」といった後悔の念を、多かれ少なかれ持つてしまう。悲嘆に暮れるあまり情緒不安定になったり、生きる意味を見出せなくなったり、肉体的ストレスに陥る人もいます。

「グリーンケア」という言葉をご存知でしょうか。「グリーンケア」は「深い悲しみ」という意味の英語です。身近な人と死別し、悲嘆に暮れる人が、悲しみから立ち直れる

身近な人と死別し

悲嘆に暮れる人が、

立ち直るお手伝い

グリーンケア

ようにケアすることをグリーンケアと言い、近年その必要性が各方面で認識されてきています。しかし、一般の理解は十分でないため、周囲の無神経な言動に傷つき、悲しみが増幅することも少なくないのです。「おくりびと」の主人公が、葬儀社の人たちの言動に憤りを感じたのも、まさにこのケースです。

関西学院大学の坂口幸弘准教授（臨床死生学・心理学）によると、ホスピスで亡くなった方の遺族への「死別後辛かった時、何が助けになりましたか」というアンケート（複数回答）で最も多い回答は「安らかな死（64%）」

「自分の気持ちを誰かに聞いてほしい」「同じような経験を持つ人と語り合いたい」と思うご遺族が集う「ひだまりの会」。専門家を交えた小グループでの分かち合いの会（左）やコンサートなど癒やしの時間（上）を提供している

で、「家族の支え（54%）」、「十分なお世話（38%）」と続くそうです。遺族にとって、「故人が安らかに眠りについた」「生前、十分にお世話ができた」と思え、家族で故人を囲む時間を持つてることが遺族の助けになります。お葬式にあたっては、そういったことをきちんと認識している葬儀社を選ぶかどうかで、ご遺族の悲しみが緩和されるか否かが大きく変わってきます。弊社では、社員各人が故人とご家族の思いをくみ取り、最高のお別れを形にします。葬祭ディレクター（厚生労働省認定葬祭ディレクター技能審査）の資

燦ホールディングス株式会社
株式会社 公益社

代表取締役社長
古内耕太郎

1963年、東京生まれ。外資系保険会社勤務時代に、慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了（MBA取得）。05年、燦ホールディングス（株）入社。09年から現職。公益社団法人経済同友会、東京21cクラブ会員。

格取得はもろんのこと、社内資格制度により、葬儀の歴史背景、宗教など専門知識からご遺族への適切な接し方まで修得したプロが葬儀を担当します。そもそも「友人の死に直面し、葬儀のありようを考えた」「阪神・淡路大震災で被災し、生と死を考えた」など、明確な入社動機のある社員ばかりです。ご遺体に、故人が好きだったメニューを供えたり、祭壇のお花を葬儀の時間に最も美しく咲くよ

う配慮します。先日、エンバーマー（ご遺体に防腐、殺菌、修復処置を施し、生前の元気があった頃の姿に近づける日本遺体衛生保全協会認定の技術者）の一人が「きれいにさせていただきますね」と、生きている人に話しかけるようにご遺体に声をかけ、その方の尊厳を守って施術しているのを見て、弊社員ながら頭が下がりました。

「いいお葬式ができたので、生前十分なお世話ができなかったことを取り返せました」といったお便りをいただくたび、「葬儀のホスピタリティがグリーンケアの要」との思いを強くします。もっとも、グリーンケアは、大切な人が亡くなるかもしれないと感じた時の「予期悲嘆」から始まり、死別後のご遺族の心持ちがプラスに転じるまで何年もの時間が必要です。そのため、弊社では医療機関との連携や、伴侶を亡くしたご遺族をサポートする「ひだまりの会」の活動にも力を入れています。



「自分の気持ちを誰かに聞いてほしい」「同じような経験を持つ人と語り合いたい」と思うご遺族が集う「ひだまりの会」。専門家を交えた小グループでの分かち合いの会（左）やコンサートなど癒やしの時間（上）を提供している



亡くなった方へお手紙を書きませんか？

公益社では、「生前に言えなかったこと」や「昔を懐かしんで」など故人への想いを寄せたメッセージ（200字以内）を募集します。住所、氏名、年齢、性別、電話番号を添えて、下記あて先まで封書、ファックス、Eメールでお送りください。

あて先は、〒103-8545（住所不要）旅行読売出版社 手紙係まで。
ファックス 03・5847・8270 Eメール otayori@ryokoyomiuri.co.jp 応募締切 平成23年1月31日

※応募された方の中から抽選で10の方に図書券（1000円分）をプレゼントします。 ※応募された手紙は返却しません。
※投稿された作品は、公益社のPR（出版、電子・電波メディアを含む）で使用することがあります。その際の個人情報の取り扱いについては、公益社のHP（http://www.koekisha.co.jp/）をご参照ください。